

英語聞き取り試験導入と熊本大学入学者の英語能力 (1)

荘口博雄・福田昇八・吉田道雄・T. ラスカウスキー
鈴木蓮一・池田志郎・松瀬憲司・A. ローゼン
村里泰昭・斎藤 靖*・瀧口明子*

Listening Test in the Entrance Examination and English Language Ability of Kumamoto University Students (1)

Hirowo SOGHUCHI, Shohachi FUKUDA, Michio YOSHIDA, Terry LASKOWSKI,
Ren-ichi SUZUKI, Shiro IKEDA, Kenji MATSUSE, Alan ROSEN,
Yasuaki MURASATO, Yasushi SAITO, Akiko TAKIGUCHI

(Received November 14, 1997)

With the 1997 entrance examination, Kumamoto University started giving a listening test in its English language test. Following the report on the performance of those accepted to Kumamoto University in 1996, this article surveys and compares the results of that study with the TOEFL ITP given in April 1997. The average scores of this group of students (Group A) were compared with those of the other group of students who were not given the listening test (Group B). In spite of the fact that the average of the total scores of Group A and Group B decreased by 9.5 and 2.5 points respectively. The average score of the listening test increased by 0.9 and 1.5 points. This suggests that high schools have already started preparing their students in spoken English, a desirable tendency which this project aims to confirm.

Key words: entrance examination, listening test, testing, spoken English

0 はじめに

本稿は熊本大学入学試験の英語に1997(平成9)年度から導入された聞き取り試験の高校英語教育に与える影響を統計的に測定することを目的として実施した英語能力調査の第2報である。導入前の英語能力については、昨年「トフル成績から見た熊本大学学生の英語聞き取り能力」と題して報告したとおりで、今回は実施初年度の成果を報告するものである。

1994(平成6)年度から新学習指導要領によって新たに高校英語に導入されたオーラル・コミュニケーション科目¹⁾を履修した学生が、本年度初めて進学してきた。1997年度から本学の入学試験に聴解力テストが導入されたということは、このオーラル・コミュニケーション科目が入学試験においても十分に評価されるということになり、これはコミュニケ

ーション能力の向上の点で貢献すると考えられる。

この調査は熊本大学入学直後の各学部から一年次生から一クラスを選んで行ったトフル・テスト成績を資料として、分析したものである。導入前の資料はすでに熊本大学教育学部紀要人文科学、45(1996)、に発表したとおりである。今回の調査は導入後初めての調査となるが、その報告を行う前に、最初の聴解力テストがいかに行われたかについて、事実関係を述べておかねばならない。

① 1997年度個別学力検査でこの聴解力テストは、文学部・医学部・理学部生物学科の3学部を対象に行われた。法学部・教育学部・工学部では実施されなかった。これは各学部への放送設備設置が段階的に行われたことによるもので、1998年度からは全面導入となる。

② 聴解力テストは、外国語(英語)の試験(120分)の開始30分後から約20分にわたり行われた。対象となる学部受験生は、他学部受験生が解答する大問IV(配点25%)のかわりにこの音声テストを受け

* 熊本大学文学部

た。これは試験場となる建物の中に設置された放送室から集中管理して各試験場へ有線放送する方式により、テストに関する指示からテスト問題までのすべてを録音したテープを操作することによって実施され、受験生は20人に1つの割合で天井に設置されたスピーカーから流れる英文を聞いて解答した。これに関する実施上のトラブルは全然なく、テストは無事終了した。この問題の正答率は、筆記試験のIVを受験した学部と平均点の差はほとんどなく、今回の聴解力テストが受験生の側にも円滑に受け入れられたことを示す結果となった。

③ 今回のトラブルによる調査は全学部を対象に行ったが、聴解力テストを実施した3つの学部の中では、クラス編成の都合上、理学部生物学科の学生を対象とすることができなかった。生物学科を除く理学部の全学科と、薬学部及び工学部の3学部は、個別入学試験に英語を課していないので今回の分析の対象とはしない。(ただし、工学部は1997年度から課すようになった。)従って、ここに導入前後の比較ができる学部は文学部と医学部の2つとなる。

1 調査方法

1997年度のテストは前年同様、各学部1クラス、全部で7クラスを対象として、1997年4月にPre-TOEFL ITPを実施し、298人がこれを受検した。

正規のTOEFLは、level 1でこれを実施するには120分を要する。これを大学の授業時間内で実施することは不可能なので、われわれは70分で実施できるように短縮されたlevel 2を使った。これはI(聴解力)、II(文法/作文力)、III(読解力)の3分野とも50点満点、総点は3つの得点の合計点を10倍して3で割った数で、500点満点となる。level 1は677点満点であるが、500点以下の得点者についてはlevel 1とlevel 2の得点は一一致することになって

表1 1996/1997年度の学部別被験者数

学 部	1996年度	1997年度
文 学	43	44
教 育	41	43
法 学	45	44
医 学	33	29
理 学	41	49
薬 学	45	42
工 学	46	47
総 計	294	298

いる。ただし、どの分野にせよlevel 2で50点を取った者は、それ以上の得点を得る可能性があるので、正確な得点を知るには、改めてlevel 1のトフル・テストを受ける必要がある。

昨年度と今年度の被験者内訳は表1に示す通りであった。

文学部と医学部の受験生は聴解力テストを受けた。以下これを学部群Aと呼ぶ。教育学部と法学部の受験生は聴解力テストを受けていない。これを学部群Bとする。以下、これら2つの学習者集団について、聴解力テスト導入前と導入後の成績を比較検討する。

2. 調査結果

表2は1997年度の学部別平均点を示す。表3は学部別最高点と最低点、並びに各領域の満点得点者数と500点満点を獲得した被験者の数を示す。

学部群AとBの平均点を1996年度成績について示すのが表4、1997年度について示すのが表5である。

表4の学部群AとBの平均値の間には有意差が認められた($t=3.40$, $df=160$, $p<.001$)。

また、表5の学部群AとBの平均値の差にも有

表2 1997年度入学者の学部別平均点

学 部	被験者数	I	II	III	総得点
文 学	44	41.1	41.2	40.7	410.0
教 育	43	42.2	40.4	40.4	409.7
法 学	44	41.1	41.8	41.6	415.2
医 学	29	43.2	45.4	44.0	442.3
理 学	49	40.0	38.6	38.1	388.9
薬 学	42	39.2	38.4	39.1	389.0
工 学	47	38.7	38.2	38.2	383.6
全 学	298	40.7	40.3	40.1	403.3

表3 1997年度入学者の学部別最高点/最低点並びに満点得点者数

学部	最高点	最低点	I	II	III	500
文学	467	363	0	3	1	0
教育	477	357	0	1	0	0
法学	463	327	0	1	1	0
医学	500	393	2	9	4	2
理学	453	333	0	0	0	0
薬学	443	340	0	0	1	0
工学	453	323	0	0	0	0
全学	500	323	2	14	7	2

表4 1996年度学部群 A と学部群 B の平均点と標準偏差

学部群	被験者数	平均点	標準偏差
A	76	431.5	31.5
B	86	415.0	30.3

表5 1997年度学部群 A と学部群 B の平均点と標準偏差

学部群	被験者数	平均点	標準偏差
A	73	421.7	31.5
B	87	412.5	26.4

意差が認められた ($t=1.99$, $df=157$, $p<.05$).

表6は学部群 A の平均点を1996年度と1997年度の成績について示し、表7は学部群 B の平均点を同じく1996年度と1997年度の成績について示す。

表6 学部群 A の年度別平均点と標準偏差

実施年度	被験者数	平均点	標準偏差
1996年度	76	431.2	31.7
1997年度	72	421.7	31.5

表7 学部群 B の年度別平均点と標準偏差

実施年度	被験者数	平均点	標準偏差
1996年度	86	415.0	30.3
1997年度	87	412.5	26.4

学部群 A について、1996、1997年度の平均値の差(表6)及び学部群 B の1996、1997年度の平均値の差(表7)について検定したところ、何れも有意差は認められなかった。

以上は3領域の全てを含んだ総点の比較である。

引き続き、聴解力のみ点数に注目して比較を行った。1996年度の学部群 A と B の平均点(表8)、1997年度の学部群 A と B の平均点(表9)、学部群 A の1996年度と1997年度の平均点(表10)、学部群 B の1996年度と1997年度の平均点(表11)の順に、平均値の差の検定を行った。

表8 1996年度学部群 A と学部群 B の聴解力平均点と標準偏差

学部群	被験者数	平均点	標準偏差
A	76	41.3	4.0
B	86	40.0	3.4

表9 1997年度学部群 A と学部群 B の聴解力平均点と標準偏差

学部群	被験者数	平均点	標準偏差
A	73	41.9	3.1
B	87	41.7	3.0

表10 学部群 A の年度別聴解力平均点と標準偏差

実施年度	被験者数	平均点	標準偏差
1996年度	75	41.3	4.0
1997年度	72	41.9	3.1

表11 学部群 B の年度別聴解力平均点と標準偏差

実施年度	被験者数	平均点	標準偏差
1996年度	86	40.2	.4
1997年度	87	41.7	.3

その結果、学部群 B の年度別聴解力では、1996年度と1997年度の平均値の差には有意差が認められた($t=2.89$, $df=171$, $p<.01$).

表12は筆記試験でテストされる能力と音声テストによって測定されるオーラル・コミュニケーション能力との相関を見るためにIIとIII（文法/作文と読解力）の合計点を示す。

表12 聴解力と文法/作文及び読解力の学部別比較

学部群 (学部)	I	II+III
A (文)	41.1	81.9
A (医)	43.2	89.4
B (教育)	42.2	80.8
B (法)	41.1	83.4

なお、今回の比較の対象としなかった理学、薬学、工学の3学部において、昨年度と今年度のトフル成績はどうか。表12にならって、IとII+IIIを年度ごとに示すと表13のとおりである。

表13 入試に英語を課さない学部の比較

学部	I (96)	I (97)	II+III (96)	II+III (97)
理学部	39.6	40.0	78.9	76.7
薬学部	37.8	39.2	82.7	77.5
工学部	38.7	38.7	77.4	76.2

表13から、英語を課さない学部においても、文法と読解力は低下しているのに対し、聴解力だけは低下は見られないことが分かる。

3 ま と め

表4の平均値の比較によって、学部群A（文学部と医学部）と学部群B（教育学部と法学部）の間には16.5点の開きがあり、両者の英語能力には相当の差があることが分かる。平均値の差の検定結果も有意差があることを示している。即ち、1996年度入学生については、学部群Aは学部群Bよりも上である。ところが1997年度入学生について表5を見れば、AとBの開きは9.2点まで縮まり、学力差が縮まっていることが分かる。平均値の差の検定では有意差が認められなかった。

このような英語能力の低下は、それぞれの学部群について両年度の平均点を比較すれば明らかである。即ちA群は9.5点の低下に対し、B群では2.5点の低下であり、A群がB群より4倍近い低下率を示していることになる。このことは次の聴解力の比較を行う場合、考慮に入れておかねばならない事実である。

聴解力の平均点は、表10及び表11に見られるとお

り、A群で0.9、B群で1.5の上昇を示している。他の分野で大幅な低下が見られるにもかかわらず、聴解力だけは僅少なから上昇しているという事実は、重要な意味を持つ。入学試験に聴解力試験が導入された結果がここに表われていると考えてよいであろう。

この上昇が、導入前のB群においても明確に見られるということは、さらに重要である。導入前の1996年は、A群が41.3に対し、B群は40.2で、1.1点の差があった。ところが、これは1997年にはAが41.9に対し、Bは41.7とその差は0.2となり、ほとんど差はないほどになった。このことは表13に示したように、英語を課さない学部においても明瞭に見ることができる。高校の進学指導においても、生徒の希望学部にかかわらず、すでに聴解力テストへの対応が着々と進んでいることを裏付けていると考えてよい。実際、県下のいくつかの高校関係者に問い合わせた結果、我々のこの推測が正しいことが分かった。全面導入となる来年度からは、そのような英語教育によって望ましい傾向が一層強まってくるものと予想される。

今回の調査によって判明したもう一つの事実は、聴解力は文法、読解力の多少の差とは関係なしに上昇するということである。即ち、表12から明らかのように、IIとIII（文法/作文力と読解力）の得点を比較すれば、学部間にはっきりした差があるのに、Iの聴解力の分野ではそれほどの差はないのである。

注

1) 「高等学校学習指導要領」によれば、オーラル・コミュニケーションはA、B、Cの3つの科目（各2単位）に別けて、次のように目標が定められる。文部省はこの3つのオーラル・コミュニケーション科目のうち、少なくとも1つを履修するように指導している。

オーラル・コミュニケーションA：身近な日常生活の場面で相手の意向などを聞き取り、自分の考えなどを英語で話す能力を養うとともに、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる。

オーラル・コミュニケーションB：話し手の意向などを聞き取る能力を養うとともに、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる。

オーラル・コミュニケーションC：自分の考えなどを整理して発表したり、話し合う能力を養うとともに、積極的にコミュニケーシ

ヨンを図ろうとする態度を育てる。

謝 辞

この調査は平成9年度熊本大学教育研究学内特別経費の助成を受けて実施されたものである。この助成申請にあたっては本学学生部長江端正直教授に代表者の労をとって頂いたことを記して、ここに謝意

を表します。

参 考 文 献

荘口博雄他 1996「トフル成績から見た熊本大学学生の英語聞き取り能力」『熊本大学教育学部紀要(人文科学) 45』pp. 161-167